

# 人の概念は原初的である ソンの「記述」

## 人をめぐるストーリー

著者	鹿野 祐介
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00133391">http://hdl.handle.net/10097/00133391</a>

## 博士論文要約

### 目次

#### 序章

#### 第一章 原初性テーゼの意味：「人」と「原初的である」

##### 第一節 「人」の概念について

##### 第二節 予備考察Ⅰ：述語の適用と属性の帰属

##### 第三節 予備考察Ⅱ：二種類の述語の適用と二種類の属性の帰属

##### 第四節 人の概念：二種類の属性が適切に帰属可能な存在者

##### 第五節 人の概念と「心的なもの」、「物的なもの」

##### 第六節 人の概念規定 P<sup>St</sup>

##### 第七節 「原初的である」の意味

#### 小括

#### 第二章 補助テーゼ：記述的形而上学と基本性テーゼ

##### 第一節 記述的形而上学という企図

##### 第二節 個別者と概念枠

##### 第三節 個別者の基本性：同定可能性非依存性

##### 第四節 時空間的体系としての概念枠

##### 第五節 基本性テーゼ

#### 小括

#### 第三章 原初性テーゼの導出

##### 第一節 人の概念を原初的であると主張する意義

##### 第二節 原初性テーゼは何を解決するか

##### 第三節 意識状態の帰属をめぐる二つの問いとデカルト主義、非所有論

##### 第四節 デカルト主義批判

##### 第五節 非所有論批判（経験の「所有」）とその検討

##### 第六節 ストローソンによる解決（原初性テーゼの導出）

#### 小括

#### 第四章 原初性テーゼへの批判と修正

##### 第一節 原初性テーゼに向けられる批判Ⅰ：「人」は、人間ではない。

##### 第二節 原初性テーゼに向けられる批判Ⅱ：「人」は、存在しない。

##### 第三節 原初性テーゼの「人」とは果たして何なのか

#### 小括

#### 終章

## 要約

我々にとって、「人」と呼ばれる存在者はもっとも身近で馴染み深いものである。我々がともに社会生活を営む存在者のほとんどすべてが人であり、我々は、人であるかそうでないかとよくよく考えて判断する間もなく、それらを瞬時に見分けられる。しかし、このことは我々が人という存在をよく理解できているということを意味しない。我々の日常を振り返っても、あるいは、哲学においても、人 (person) の概念は必ずしも一義的に捉えられるわけではないのである。

哲学において、人の概念をめぐるのは、これまでに極めて多くの解決困難な問題が見出されてきた。我々はたしかに、人が身体をもっており、心をもっているということを認めている。しかし、これら、人と、身体と、心が互いにどのような関係にあるかについての共通見解はない。たとえば、デカルト主義のもとでは、身体と心は互いに独立に存在し、人はそれら身体と心から成る複合物にすぎないとみなされる。また、たとえば、物理主義のもとでは、心が身体と独立に存在することはありえず、それはせいぜい物理的なもの（ないし、それらによって還元的に説明可能なものに）であるとされ、人は身体に他ならないか、あるいは、心的現象が生起する限りでの身体という派生的な身分を与えられるものにすぎない。人という存在の捉え方に関するこのような見解の不一致は、心と身体（そして、人）をめぐる、現代の心の哲学に至る問題圏を形成する。

しかし、人という存在についての理解に関する哲学的問題は、心の哲学にとどまるものではない。近代において、ロックは人の概念を、その特殊な意識の作用にもとづいて、生物学的な種としての人（「人間」）から区別された、責任の帰属対象としての人（「人格」）として規定した。責任の帰属対象としてのは、それが責任を帰属させられるに値する主体の身分に関して、また、当の行為の責任が正当にも帰属させられる条件に関して、その存在がいかにして捉えられるかが問われる。すなわち、ある特定の行為の責任が帰属させられうる人とはいかなる存在か、責任が帰属させられるのが行為を為した当の人に限られるとすれば、その当の人が同じ一人の人であるということはいかにして捉えられるか。ここには責任の帰属対象としての人々の定義可能性、人の通時的同一性という問題圏が見出される。

さらにいえば、人の概念に関する定義は、我々が道徳的配慮を向けるべき対象群の画定を伴う。我々の多くは、日常的に、無機物や動物に対してよりも、人に対して格別の道徳的配慮を向けるべきであるという（ある種の人間中心主義的な）倫理原則を採用している。生命なき無機物よりも生命ある有機物のほうが、生命ある有機物のなかでも人以外のいかなる生命よりも人の生命のほうが価値あるものとして捉えられている。このような差別は、実定法に訴えるまでもなく、人々の日常的営みのあらゆる場面に見出される。だが、この事実は単純な人間中心主義として理解されるわけではない。というの

も、我々が道徳的配慮を向けるべき対象の画定は、単に生物学的な人間か否かによって定まらないからである。我々の世界には、人に限りなく近い存在であるにもかかわらず、我々が道徳的配慮を向けるべきかどうかを判定することが困難な、ないし、判定が一致しない対象群（人間の胎児や胚、脳死患者や遺骸）が存在する。我々はそのような存在者を「人」と呼ぶべきか否か、つまり、それらに道徳的配慮を向けるべきかどうか。人の概念は、このような応用倫理的な問題圏をも形成する。

以上のように、複数の極めて重要な哲学・倫理学的問題が、人の概念を中心に重なり合うという様相を呈している。これらの問題の解決ないし解消が、もし可能であるとすれば、我々は人の概念がいかなるものであるか、いかにして捉えられるべきかについて、共通見解を形成する以外にない。あるいは、少なくとも、個々の問題圏において、依拠されるべき人の概念は一律に規定されてしかるべきである。というのも、人とは何か、それがいかにして理解されるべきかについての共通見解の不在は、まさにそれが主題とする人について無用な混乱と議論の錯綜を生むだけだからである。筆者の見立てでは、上に挙げた哲学・倫理学的議論は、詰まるところ、人という存在がいかなるものとして捉えられるべきかという、人の概念をめぐる見解の不一致に由来している。

だが、現代においてなお、人の概念に関してはいずれの問題圏においても論争状況にある。このような問題状況において、人の概念をめぐる見解の不一致に起因する哲学的諸問題は、いかにして解決されうるか。当然、その方途のひとつとして、人はいかにして理解されるべきか、その必然的なあり方の解明が鍵となることは疑いえない。

本論考では、人の概念についての必然的なあり方（我々は人という存在をいかにして理解すべきか）についての探求が試みられる。その手がかりとなるのは、P・F・ストローソンが『個々のもの』（原題 *Individuals*）において提起した「人の概念は原初的である」という主張（以下、「原初性テーゼ」と呼ぶ）である。原初性テーゼは、身体と心、そして人との相互関係に関して、人の概念が身体概念や心概念によって説明されたり、分析されることがあってはならないとする主張である。この主張のもとで、人というものは、身体と心から成る複合物、あるいは、身体と同一視されるもの、ないし、身体によって派生的に説明されるものという二次的な身分に位置づけられるべきではなく、身体と心を説明するためにまずもって必要とされる一次的な身分に位置づけられるべきであるとされる。ストローソンが提起した原初性テーゼが、デカルト主義や物理主義によってその潮流が形成されてきた心と身体（そして、人）の位置づけをめぐる問題圏（心の哲学）に、新たな角度から切り込む主張であることは疑いえない。それにもかかわらず、ストローソンの議論に関する先行的研究では原初性テーゼの妥当性は十分に検討されてきたとは言い難い。そのため、本論考では、ストローソンによる原初性テーゼがいかなる主張であるか、その解明が試みられた（本論考序章・第一章）

まず、序章では、原初性テーゼがいかなる主張であるかを確認するため、それが先行的研究においていかに受け入れられてきたかを、とりわけ、多くの批判にさらされてきた（１）ストローソンによる「人」の用語法、（２）P 述語、M 述語という概念区分、（３）一人称代名詞「私」の用法、という三つの論点に焦点化して概観を行った。

第一章では、予備考察として、原初性テーゼに関連する諸概念（述語の適用、属性の帰属、P 述語および M 述語）について整理を行った。そのうえで、原初性テーゼを構成する主語「人」と述語「（は）原初的である」の各々の意味を確認し、原初性テーゼとして主張されることの意味を明らかにした。原初性テーゼにおいて「人」として言及されるものは、人称代名詞（「私」、「あなた」、「彼（女）」、「我々」、「彼（女）ら」など）や人を指示する語彙（「あのひと」、「このひと」など）によって指示される対象であり、また、P 述語と M 述語を適用することで、P 属性と M 属性を適切に帰属させることのできる存在者であること（本論考ではこのような存在者を [Pst] と呼ぶ）が確認された。そして、このような意味での人の概念が「原初的である」とは、我々が世界をそのもとで思考する概念枠において、[Pst] としての人の概念は心の概念や身体概念によって分析されえない、つまり、人の概念は心や身体概念の被説明項として機能することはなく、説明項として機能するという（そして、このような概念間の関係について、説明項として機能する概念は「一次的である」、被説明項として機能する概念は「二次的である」とその位階に応じて順序づけられること）が確認された。

しかし、原初性テーゼの意味が明らかにされたとしても、このテーゼの哲学的意義を見定めるには十分ではない。というのも、原初性テーゼは、ストローソンが「記述的形而上学」と標榜する自身の哲学的探求のもとで、中心的な主張として位置づけられているからである。記述的形而上学とは、世界に関する我々の思考の枠組みについてのありのままの記述を試みる哲学的企図である。とはいえ、ストローソンが記述的形而上学を主題的に述べた箇所はわずかであり、そのもとで語られる「記述」がいかなる意味であるか（経験諸科学における「記述」といかに異なるか）、またその射程がどこまで及ぶかについて明らかにされたとは言い難い。そこで、本論考では、原初性テーゼがいかなる主張として理解されるべきかを明らかにすべく、記述的形而上学という哲学的企図と、加えて、ストローソンがそのもとで展開する独自の同定理論にもとづく主張（本論考では「基本性テーゼ」と呼ぶ）について詳細な検討を行った。（本論考第二章）

第二章でまず確認されたのは、ストローソンの企図する記述的形而上学が、我々の概念枠に関する経験的記述ではなく、我々の概念枠の必然的なあり方（ないし我々のア・プリオリな認識）についての記述を意図するものとして理解されなければならないということである。このような記述的形而上学についての理解は次のような含意をもつ。すなわち、原初性テーゼは、人の概念についての数ある選択可能な理論のひとつとしてではなく、我々の概念枠に関する必然的真理として提示されているのである。そうであるとすれば、我々はようやくこの段において、当初の問題状況（人の概念をめぐる見解の

不一致)が原初性テーゼにより打開される可能性を見て取ることができる。それゆえ、我々が次に問うべきは、人の概念が原初的であるということは、我々が人についてもつ必然的な理解に合致するか(原初性テーゼは妥当か)となる。

ただし、原初性テーゼの妥当性を検討するためには、ストローソンが『個々のもの』で提示した、個別の存在者に関する同定理論およびその形而上学的前提についての考察が必要不可欠である。そのため、本論考第二章第二節から第五節では、ストローソンによる独自の同定理論についての検討を行い、彼が、人というカテゴリーに属す個別の存在者についての同定(他から区別された単一の個体として特定する認識的行為)が、他のカテゴリー(心や身体)に属す個別の存在者の同定に依存せずになされうることが見出す(彼はまた、このような同定可能性非依存的な特徴は、人とは別の、物質的なもののカテゴリーに属す個別の存在者についても当てはまることを見出す)ことが確認された。第二章で展開された議論により、原初性テーゼの形而上学的探求における位置づけと、原初性テーゼを下支えする同定理論が確認されたことで、原初性テーゼがいかなる形而上学的主張として理解されるべきかが明らかにされた。

これ以降の議論で、いよいよ原初性テーゼの妥当性が問われる。だが、原初性テーゼがいかなる前提のもとで導出されるかはストローソン自身の論述から必ずしも明らかではなく、この導出過程を詳細に検討した先行的研究はかつてない。そのため、本論考では、原初性テーゼの妥当性の検討に先立って、原初性テーゼの導出過程を詳らかにし、その論証の再構成に着手した。

第三章では、第一に、ストローソンが『個々のもの』に先立つ論文「人」で提示する問題意識(「私」の二重性の問題)と、『個々のもの』で提示する問題意識(独我論の問題)がいかなる問題であるか、そして、これら二つの問題の相互連関が確認された。(第三章第二節)

ストローソンは、一方でデカルト主義における、人についての概念的理解(身体と心は互いに独立に存在し、人はそれら身体と心から成る複合物である)を、他方で非所有論における、人についての概念的理解(人は身体に他ならないか、あるいは、心的現象が生起する限りでの身体という派生的な身体)を退けようとして批判的議論を展開する。その際、拠り所とされる重要な論点は、我々は自分自身にも自分以外の他者にも経験の所有(P属性の帰属)を認めるということである。我々にとって、自分自身に見出される経験と他者に見出される経験との差異が明白であることはたしかであるが、他方で、我々が「SはPである」という仕方で自分自身にも自分以外の他者にもP属性を帰属させることができ、また実際にそのように帰属させているということもまたたしかである。ストローソンはこのような我々の日常的な世界理解を説明するという観点から、デカルト主義および非所有論の問題点を暴き立てる。

デカルト主義において、経験の所有者(ないしP属性の帰属対象)は定義上、唯一の精神的実体に固定される。しかし、このことは経験を他者が所有すること(P属性の他

者帰属)を不可能にする。加えて、経験の所有者を同定する機会が定義上奪われているため、経験そのものから区別された経験主体の概念さえ喪失する。非所有論(本論考で、「弱い非所有論」と呼ぶ)において、経験の所有者(ないしP属性の帰属対象)は任意の身体に帰属されうるか、もしくはそのような所有は無意味であるとされる。しかし、このことは経験を個別の経験(ないしP属性)として同定することを不可能にする。また、たとえ異なる仕方で経験(ないしP属性)を同定可能であるとしても、そのときこの経験はもはや単なる客観的な出来事としてのみ捉えられるに過ぎず、「経験」として捉えられることがない。以上のように、デカルト主義と非所有論のいずれも、我々のもっとも日常的な世界理解について説明する上で概念的な不整合に陥ることが示される。(第三章第四節・第五節)

以上のような論証を経て、人の概念は原初的であるとする主張(原初性テーゼ)が提起されること、そして、この原初性テーゼを承認することで、デカルト主義および非所有論の両方が陥る問題がいずれも回避されること、また、このテーゼのもとで、「私」の二重性が調停され、独我論からの脱却に成功することが確認された。さらに、原初性テーゼを承認するということの含意として、「私は痛みを感じている」という文について、この「私」が常に他者に情報を伝達するために用いられた指示表現でなければならないこと、また、この「痛み」が個別の経験(P属性)であるためにその唯一の所有者について、我々が同定可能な仕方で措定されるのでなければならないことが明らかにされた。(第三章第六節)

第四章では、以上のような論証を経て提起された原初性テーゼについて、その妥当性が検討された。とりわけ、原初性テーゼに向けられうる批判として、ウィリアムズによる反論を取り上げ、その論証の再構成がなされた。ウィリアムズにより提起された反論は主に、(1)原初性テーゼにおける「人」は人間ではない、(2)原初性テーゼにおける「人」は存在しえない、の二つに分けられるが、本論考ではこれらのそれぞれについて、ストローソンないし原初性テーゼを擁護する観点から応答の可能性を探った。本論考の考察から明らかにされたのは次のことである。第一に、(1)原初性テーゼの「人」について、我々が「人間」として呼ぶ存在、つまり、ある特定の生物学的な種の成員を想定することは、原初性テーゼに関する誤解にすぎない。第二に、(2)原初性テーゼの「人」は、ウィリアムズが批判する仕方で「無意味な」存在ではありえず、それゆえ、そのような人のカテゴリーを有意味な仕方で確保することができる。

他方で、以上のような応答は、ストローソンがある箇所で述べた見方(原初性テーゼにおける「人(person)」が「人間(human being)」と共外延的である)と両立不可能である。しかし、ストローソンによるこの主張は、原初性テーゼを維持するうえで許容されえない。この一点において、本論考ではストローソンと袂を分かち、原初性テーゼを維持すべきであることが提案された。また、その際、原初性テーゼが誤解される、もしくは、過小評価される原因となる主題の呼称に異なる呼称を与えることまでが提案された

（ストローソンが「人」と呼ぶ概念は、「誰か (someone)」と呼ばれることでより適切に捉えられる）。すなわち、P 属性と M 属性の両方を適切に帰属可能な存在者であり、その概念が我々の概念枠において他の概念によって分析されえないものとは、我々が「誰か」と呼ぶ、いかなる概念的理解をも前提しない段階での不特定の人についての概念である、と。

この最後の提案は、一方で原初性テーゼを誤解から救う点で有益である。しかし、より重要なこととして、「誰か」という概念はストローソンが『個々のもの』で提示した、一見不可解な、人と物による二元論的世界観（物質的なものの、および物質的なものを所有するもの（人）のカテゴリーに属す個別の存在者はいずれも基本的であり、それゆえ、物質的なものと人の概念は我々の概念枠において、中心的な位置を占める）についての極めて自然な解釈を提供する。つまり、彼が人と物という一对の概念によって捉えていた原始的概念とは、我々が不特定の対象について割り当てうる「誰か」と「何か」に相当し、我々はこのうちの「誰か」にしか P 述語を適用することを「夢にも思わない」のである、と。以上が、本論考において原初性テーゼについて明らかにされたことである。

では、本論考で解明された原初性テーゼはいかなる哲学的含意をもつか。

第一に、ストローソンが提示した原初性テーゼは、我々が世界について抱く日常的な世界理解の枠組みをもっとも整合的に説明するための図式として理解されるべきであるということである。また、このような説明図式は、我々の概念枠についての必然的あり方に他ならない。そうであるとすれば、我々は人の概念を、ストローソンによる規定 [P<sub>st</sub>] のもとで捉えなければならない。つまり、人の概念（「（は）人／誰かである」）とは、（1）人称代名詞（「私」、「あなた」、「彼（女）」、「我々」、「彼（女）ら」など）や人を指示する語彙（「あのひと」、「このひと」など）によって指示される対象であり、かつ（2）P 述語と M 述語を適用することで、P 属性と M 属性を適切に帰属させることのできる存在者でなければならない、と。

第二に、以上の観点から人の概念をめぐる様々な問題圏を眺めると、我々はそれら問題圏で語られる「人」が、[P<sub>st</sub>] として規定される限りでの人の概念を逸脱している（単に外延を異にするわけではなく、この概念の必然的基盤を見逃している）ことが容易に見て取られる。特定の生物学的な種である成員としての人（人間）であれ、反省的意識によってその本性を特徴づけられる責任の帰属対象としての人（人格）であれ、それらは必ずしも人称代名詞の指示対象でもなければ、P 述語と M 述語の両方を適切に帰属可能な存在者としては捉えられるわけではないのである。それゆえに、我々は本論考の考察にもとづいて、ストローソンに倣って、次のように結論づけなければならない。原初性テーゼが明確に理解されず、承認されないうちは、人の概念をめぐる哲学的問題についてのいかなる試みも成功しない、と。



本論考はストローソンによる原初性テーゼがいかなる主張であり、それが哲学的にどのような射程をもつかを、彼自身の「記述」についての慎重でかつ極めて詳細な検討を通して明らかにした。その結果、結論づけられうることは、人の概念をめぐるなされてきたこれまで哲学的議論の多くは、その根底にストローソンが規定する人の概念、つまり、不特定の対象としての誰かの概念によって基礎づけられていないという点で、失敗に終わるという事実である。しかし、裏を返せば、我々は原初性テーゼの意義を掘り起こし、現代において明るみに出した本論考のもとで、ようやく人の概念をめぐる問題圏に共通の地盤を提供することができるのである。

以上のように、人の概念についての必然的なあり方の探求という本論考の目的は、原初性テーゼという人の概念の必然的なあり方に関する擁護可能な共通見解が維持可能であることを、それが依拠すべき形而上学的理論とともに再定式化したことによって達成されたと評価することができる。